

富士山の世界遺産登録を前に

青木 直子（NPO 法人 富士山クラブ事務局長）

ますます人があふれる富士山

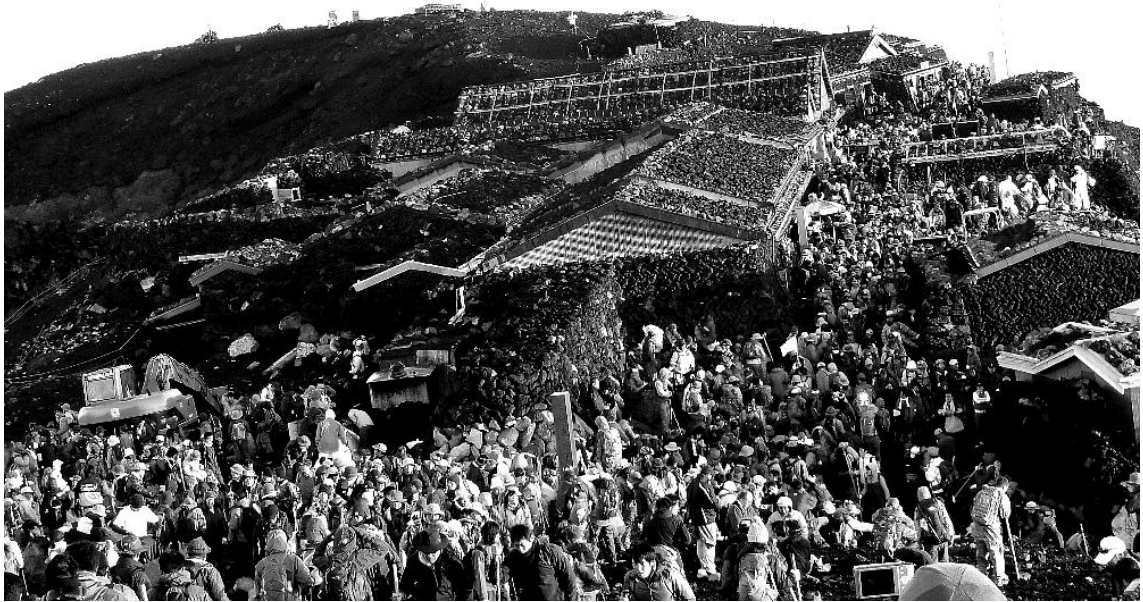
富士山の開きは7月1日。とはいえ、7月の初旬は雪が多く残っている。実際、静岡側の富士宮口登山道は7月2週目くらいまでは八合目以上の登山道は通行禁止になっている。（静岡県のホームページなどで登山者に案内しているが、簡単な柵と「通行禁止」の札があるだけなので、登ってしまうことは可能だが）。一方河口湖・吉田口登山道は、6月末に山小屋総出で登山道の雪かきをして、五合目から何とか頂上まで登山道を開通させる。この河口湖・吉田口のルートは、登山道と下山道が分かれているが、雪が溶けて下山道が使えるようになるのは、7月の2週目に入る頃である。ちなみに、今年の夏は雪が多く、頂上を一周するお鉢めぐりができるようになったのは7月22日だった。

年間30万人が夏のシーズンに登るといふ富士山。ピークを迎えるのは、学校が夏休みに入る7月20日頃から8月のお盆過ぎくらいまで。私は毎年、少なくとも3、4回は頂上まで登っているが、ここ数年は登山道の渋滞がひどい。4つの登山道の中で登山者が一番多い河口湖・吉田口登山道では、金曜日を含め週末は、六合目あたりから身動きとれないほど登山道に人が溢れる。富士山の登山者数は、平成22年は過去最高の32万人を記録し、H23年は30万人を下回ったものの、去年は30万人を超えた。富士山は世界中にその名を知られているが、今年6月末に可否が決まる“世界遺産”登録の話題が続いているせいか、登山が増える傾向にある。最近では中国、韓国をはじめ、アジア諸国からの登山者も目立つ。

汚い臭い15年前のトイレからすべてがエコなトイレへ

かれこれ15年前までは、富士山のトイレは臭い、汚いが当たり前だった。夏のシーズンが過ぎるとトイレのタンクから山肌へと、し尿がたれ流されトイレトペーパーが川のようになり、登山家の田部井淳子さんが「富士山の白い川」と名づけ有名になった。当時は世界自然遺産での登録を目指していた富士山であったが、“世界遺産”が話題になるにつれ、山ろくの不法投棄ゴミ問題とあわせ、トイレ問題がクローズアップされた。

平成11年に富士山クラブが結成され、最初に取り組んだ2つの課題が、まさにこの2つの問題であった。平成12年の夏には5合目にバイオトイレを実証実験設置、翌13年夏には頂上にバイオトイレを実証実験設置、越冬させ平成14年の夏まで稼働させた。市民が動けば、県も国も動く。市民が中心となった取り組みに合わせるかのように、県や国からの補助金制度ができ、山小屋のトイレ改善が始まった。環境省、静岡県、山梨県が管理するトイレ施設が新たに設置または整備されていった。平成18年、富士山のすべてのトイレがエコに生まれ変わった。



ごった返す山頂の様子（平成 24 年 7 月 28 日早朝 5 時 18 分撮影）

そして今のトイレ事情

さて、今年の夏の富士山頂の出来事だ。7 月の最終週の金曜日に富士山に登った。富士山に登山者が押し寄せる 20 日からちょうど 1 週間、多くの人押し寄せる日が連日続いていた。その日も山頂は御来光を拝む人たちで埋め尽くされていた。そのあとの 2 時間くらいはトイレの大行列が起きる。30 分以上待つ場合もざらだ。

富士宮口にある環境省が管理するトイレの前も長蛇の列。いつもトイレを管理するスタッフ一人が常駐している。いつもは男性の列と女性の列だが、この日は違った。トイレの入り口に 3 つの列ができていた。入り口に札が 3 枚。男性大、男性小、女性、外国人にも分かるようにイラストが添えられている。男子は大と小の区別の絵入り。通常なら女性の列が長い。しかし今年は男性の列が異常に長い。

「男性の皆さん、どうしても我慢できない人は言ってください」。管理スタッフが叫ぶ。聞くとところによると、ピークが始まり 1 週間にして、すでにオーバーユース、いくつかのトイレ（便器）が故障して使用不能になってしまったとのこと。女性専用、男性は目的に応じて 2 列に分けることによって、朝の数時間の混雑時に何とかスムーズに混雑を緩和できないかと考えたらしい。故障したからといって、山頂ではすぐに修理ができるわけではない。「トイレ（のし尿）があふれてどうにもならない。一人ですべて出来ない」と泣き言をもらしながらの人の交通整理は、「大変ですね」と同情することしかできない。

イラスト入りのトイレの札は漢字がわからない外国人にもすぐ見分けがつく。女性専用にしたトイレの数も多いせい、女性の列が比較的スムーズに動くのにくらべ、男性大に並んでいる人は、忍耐でこらえている様子。その列に並んでいた外国人の言葉が聞こえた。「トイレですることは誰でもわかっているけど、『男子大』の列で、さらしものように並

ぶなんて恥ずかしい、もう 20 分待っている」。すっきり顔のトイレから出てきた、同じパーティの女友達に話しかけていた。

オーバーユースでトイレが溢れて使えなくなったのは、数年前に河口湖・吉田口の下山道のトイレでも起きた。下山道は 8 合目付近の山小屋を過ぎると、6 合目までの間にこのトイレ 1ヶ所しかなく、このトイレが使えないのは大問題になった。

いくらトイレを環境配慮型にしても、許容量を超えて人が使えば故障もする。大変なのは 3776m の富士山頂でいかにメンテナンスをするかだが、もともと不便な山の上である。押し寄せる人に合わせてこれ以上トイレを増やすことも容易いことではない。

以前、アメリカ人の研究者を連れて富士山頂に登ったときに、遠くから眺めてこんなに美しい富士山の山頂がこんなに賑やかなのは驚きだと話していた。空気の薄さを除けば、土産物を沢山並べる山小屋、自動販売機、郵便局、神社、公衆トイレ、ふもとの町の一角だ。眉をしかめるのではなく、驚嘆していた。そのうち、山頂限定の富士山バーガーを売るチェーン店があってもおかしくないと笑っていた。

富士山は夏のシーズン中で天気がよければ、山の初心者でも簡単に登ることができる。誰でも受け入れる山であるがゆえ、日本一高い山の上だということを忘れがちだ。観光地ではない。人がたくさん来るからといって、トイレの数を増やせる場所でもない。登山道の混雑とあわせ、入山者数をコントロールすることも必要ではないかとの議論が持ち上がっている。

世界遺産登録を前に

今から 14 年前、富士山の世界遺産登録、このときは自然遺産のカテゴリーで目指していた。このときも自然環境保全の動きや、管理をどうしたらよいかとさまざまな取り組みがあったが、みながばらばらに目指している形であった。結局は、「開発されすぎている」ということが大きな理由で、世界“自然”遺産にすることを当時の環境庁は断念した。

そして今、“文化”遺産での登録を目指している。以前の運動とは違って、静岡県、山梨県の横の連携がとれ、また私たちのような環境市民団体とも協働して連携していこうという働きかけが増えた。当クラブも、環境省や県との協働事業が増えている。富士山は、国立公園の一部であるし、文化庁の特別名勝でもある。静岡県、山梨県の県有地もあれば、富士山をとりまく市町村の土地もある。林野庁の管轄の国有林もある。そして八合目以上が浅間大社の所有地と、管理しようにもなかなか一つにまとめることが難しかった。管理や制度の一元化をしていこうという動きがでてきていることは歓迎すべきことだ。

一方、“文化”遺産ということで、富士山はもともと自然のものなのだとということがぼやけてしまっている。そこに美しく豊かな自然環境があったからこそ、千年以上も前から歌に詠まれ、絵画に残り、文化が生まれてきたのではなかったのか。富士山をどう保全していくのか、そのためには何が必要か、そこに住む人がどう関わっていくべきなのかの議論が十分できていないのではと思う。

自然を完全に保全するには、手つかずかつ人間の影響を排除すること、入らないことが一番だ。しかし自然は人間の思考や心を豊かにし、癒され、楽しむものでもある。富士山でも保全と利用のバランスをどうとっていくかが重要だ。かつて開発されすぎているとして、世界遺産をあきらめた。自然から文化にカテゴリーを変えて、今、開発されすぎている、かつ観光地としてすでに多くの人々が訪れている富士山を世界遺産として登録することを目指している。富士山に関係する一人ひとりにとって、保全と利用のバランスをどうとっていくのか、大きな挑戦であり課題である。

昨年京都で、世界遺産条約発効40周年の世界大会が開催された。そこで強調されたのは、世界遺産となった地域を保全していくにあたり、いかに地域の人々が保全や保護に関わるのかが重要であり、そしてこれからの未来を担いこれらの人類の遺産を受け継いでいく若い人材をどのように育てていくのかが大切と強調された。

世界遺産登録を機に、富士山では、富士山の環境保全に係るより多くの関係者（行政、企業、ツーリズム業者・団体、市民、NPO などのステークホルダー）が、連携をとり、より大きい枠組みのなかでの、制度の導入やルールづくり、協力体制の構築が図られるべきだと考える。

富士山クラブとして

ここ数年、私たち市民団体と市町村レベルから県、国との連携が進んできていた。また、富士山クラブ設立当初から取り組んできたごみの不法投棄問題では、今までに500トンのごみを回収してきたが、それは地元または日本全国から来るボランティアが協力してくれたおかげであり、富士山の地元そして全国の市民の連携が生まれている。活動範囲が県や市町村に限定される市民団体が多いなか、県や国との協働・連携事業や、市民団体のネットワークを活用し、地域を横断的につなぎ、実践活動、情報発信する環境市民団体として、富士山クラブは15年間活動を続けている。

富士山クラブとして、この連携とネットワークを活かし、日本人の誇りであり、心のふるさとである富士山において、地域コミュニティにおいて市民の環境保全活動の推進役として、富士山クラブの役割を果たしていきたいと思う。

世界遺産登録を前に、見えてきた課題、そして未解決やこれから起こりうる懸念される課題がある。環境協力金（利用料）の導入、エコツアーのガイドラインの徹底、観光客としての登山初心者へのマナーや情報の提供、ぼい捨てごみの増加等々。富士山に活動拠点を置く市民団体として、これらの課題から逃げるわけにはいかない。富士山で解決できれば、それがモデルとなって他の地域での解決のヒントになるかもしれない。そう考え、地道に活動を続けていきたい。

以上